
迷灯鏡

水谷風狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷灯鏡

【Nコード】

N1642S

【作者名】

水谷風狼

【あらすじ】

隠は死神の中で最強とたたわれる一族本家『様壺^{なぼり}字族』の子供の一人。なぜか長い間世間からその存在を隠され、つい最近まで実の親や姉妹とも隔離されていた。そんな隠は、様壺字族の伝統である『人間界研修』のため人間界に降り立つことになって……。

一 不運*

「じゃあ、行つてらっしゃい。」

「がんばんなよ。」

「体壊すんじゃないよ。」

神界の見慣れた面々に、似た様な言葉ばかりを掛けられながら、
隠は振り返り振り返り、頷いた。
なはり

十六才。隠ももう一端の神となる時が来たのであった。いや、

鷺宮村の長老は『遅すぎた』と悔やんでいた。

隠は三大神族の一つとも呼ばれる程の力を持つ、強大な死神の一族、『様壺字族』ヨウイチジの子であつた。五人姉妹の一人であつたらしいが、さて長女なのか、次女なのか、はたまた末っ子なのか、本人は何も知らない。と云うのも、何故かその存在を世間に隠され、姿が表に出たその後も、世間に向けては養子として育てられて来たからだ。いや、もしかしたら、知ろうとしなかっただけなのかも知れないが。隠は誕生してからずっと、姉妹たちの住む豪華な宮廷とは大違いの、古ぼけた庵の様な一軒家にて暮らしていた。其処には親代わりとして『師匠』こと金武丈老人きんぶぢやうろうじんが同居していた。彼は読み書きから社交について、何から何まで親身になつて事細かに教えてくれた、非常に良き御師匠なのである。

と言う訳で、世間に知れた隠の礼儀の良さは、正に金武丈老人の努力の賜物という所であつた。

しかし、何年も影の生活をしていたのが其の所以なのか、隠は他者を拒んだ。住居を姉妹と共にした時も、彼女は血の繋がりの有る者でさえ受け入れず、ただ師匠の肩にしがみ付く様にして、顔を出そうともしなかった。家族が見たのは、金武丈老人の背中で揺れる、日本人形のような長い髪のみだつた。

長老が遅かったと後悔したのは、その人間不信が心の染みと成る前に行かせたかつたからだつた。

「隠、時間だ。」

他の者と同じ様に見送りに着ていた師匠が、悲しいとも嬉しいともつかない、何とも言い難い淡い色を目に乗せ、孫娘同然の女弟子に旅立ちを促した。隠は、表情を変えず浅く頷いた。

すると神々は、隠の姿が良く見える様に、互いに身を寄せ合って前方を覗き込んだ。隠が『入り口』に入るのをよく見るためである。『入り口』とは俗の呼び名で、元の名は『神人ツナギ』といった。これは神界と現世をつないでいる箇所、その入り口に体の一部が触れた途端、人の世に降り立つことができる、というものだった。いわば世界と世界とを結びつける、唯一の扉だといえるだろう。隠が手を、『入り口』に向かってのばす。空気が、ピンと張り詰めたのを、誰もが感じる。入り口は隠を拒む気配も見せず、平素と変わらず扉を閉ざしたままである。

（隠の指先が戸に触れれば、あの子は目の前からいなくなる……）
金武丈老人は今更、言いようのない寂しさをおぼえた。ほかの神々たちは、まばたきもせず、隠の指先をじつと見つめている。

「あっ」

誰かが声を発したか発しないかのうちに、隠は煙のごとく消えうせていた。

「ほお……」

人ごみから安堵の声が上がった。

「よきかな、よきかな。」

「よかったね金武丈さん。隠ちゃん、無事に行きましたよ。」

白髪の老婆が金武丈老人の方に手を置いた。老人は何も言わなかった。

「しかし、不思議なものよのう」

「この入り口は、誰が作ったんだかねえ」

「人の世界とわれらの世界がつながるなど、夢にも思つたらんかったがのう」

「これこそ人間のいう『神業』というやつじゃて」

見送りを済ませた神々は、口々に勝手なことをしゃべりながら自宅へと道を急いだ。

もうすぐ昼時。昼食の支度で村はまたにぎわうだろう。金武丈老人も、隠の消えていった入り口に背を向けた。が、すぐに振り返った。眉が八の字に下がっている。

一人の男だけが気づいていた。

ついに、誰も隠の声を聞かなかったことを。

神たちの言葉が、形でしかなかったことを。

「隠……お前はいくつになっても、それだけは隠し通すのか……？」
それは心のうちであつた

心中にある孤独を、隠は師匠にすら打ち明けてはいない。

「もう心がうつろになって、己の孤独がわからなくなってしまったのか？ 隠よ……」

老人はふかぶかのため息をつき、首を振った。それからやせこけた足を踏みこんで、その場を去っていた。

この男だけが気づいていた。

この男しか、気づかなかった。

一 不運*（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

Regulusを書き始めてから能力がガタ落ちした気がしたので、これを載せながらなんとか持ち直していこうと思っています。気軽に感想ください。

一 不運**

一 不運

隠は茶店の前に降り立った。降りるとき、心の臓が死ぬほど苦し
くて、気を失いかけたが、なんとか気を持たせた。

（ここはなんというところだろう）

隠は周りを見渡した。

……ひょうたんを振り回して歩く、赤ら顔の男。漆塗りの何かを
片手に、子供の手を引く中年の母親。楽しそうに飛び交う、人々の
笑い声。

どうやら自分は市にいるようだ、隠は考えた。左右に米屋や蕎
麦屋、扇子屋などが立ち並んでいる。人が沢山自分のそばを通り過
ぎていく。

（これが人の世。村の市のそう変わらない）

変わることがあるとすれば、住むところを探す必要の有無くらい
であろう。正直、全く考えていないわけではなかったが、どうもあ
てがない。人間に混ざっている同胞（死神）を探して屋根を借りる
しかなさそうである。隠の姉妹の一人が、

「行くところがなければ、先住者を殺して代わりにすめばいい。人
を殺すのが私たちの仕事なのだから」

と案を出してくれたものの、何となく悪い気がする。

隠は特殊な死神で、姉妹たちよりも情に富んでいた。死神全部が、冷酷無慈悲というとまた違うのだが、人を殺すことを躊躇うのは死神らしくない。更に隠は、姉妹の仲で一番魔力が強かった。意のままに人の命を操ることができた。でも人を殺めることができなかった。だからしばしば、隠は、他の死神からお咎めを受けた。考えに考え、結局、

（とりあえず昼餉にしよう。店を回ればきっと何かある）

自分の口に合う食べ物なら、神界でとくに探してあった。これほどの店があるならば、好きなものの1つや2つ、すぐに見つかるだろう。そう考えて、隠は銭の入った巾着を手を取った。

「ねえちゃん」

突然、後ろから野太い声が聞こえてきた。呼ばれたかと振り向くと、如何にも柄の悪そうな大の男が5人ほど立っていた。一人が、にやけながら訊ねてくるのを聞けば、

「ねえちゃん、今、銭持ってるだろ。」

隠は軽く首を縦に振った。

「そうか。だったらその御足……」

ひげ面の男が隠の両肩に、思い切り手のひらをたたき付けた。凄みのある顔で、男は言った、

「その銭、おれらによこさねえか？ええ？」

うつとしい髭面が、隠の顔に迫ってくる。隠は不意打ちに驚きはしたものの、びくともしない。

（何を言っているんだろう。出会いがしらに金を寄越せという者にやりたくはない。）

隠は真顔で首を振った。髭面は一瞬、拍子抜けした表情を浮かべたが、隠の力強い、上目遣いで、しかしどこか見下している様な視線が頭に來たらしく、手の平にぐっと力を入れて、

「金を寄越せ！今すぐにだ、さあ早く！」

と、隠に肩を揺すった。しかし隠は特に動ぜず、ちよつと眉根を寄せてあつさりと手を払いのけた。男はかなりの力を加えていたはずなのに、まるで綿でも払うように自然な動きだった。一番後方にいた、葉巻をくわえた者が、ちつと舌打ちしたのが見える。

（厄介なことになった。これはたぶん、『盗賊』という奴だ）

今更思い出した自分に、隠は少しがっかりした。気づくのがおそすぎる。

不意に、わき腹をえぐるようにつつかれた。

「あつ」

ちやり、と銅銭と小判のこすれる音がたった。

「金袋は其処だ！奪ってしまえ！」

隠は咄嗟に身を翻し、盗賊達の汚い手をよけた。

（早い）

見くびっている場合ではないようだ。盗賊はあきらめてくれそうにない。

（致し方ない。これをあまり使いたくはないけれど……）

隠は両手を前に突き出し、波のようにつねらせた。

一 不運**（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

一 不運***

「何をしているのだ、お前は？」

白い手のひらを自分たちの方へ突き出して、奇妙な動きをしている黒髪の少女の方へ、水色の晒しを巻いた痩せ型の男が一步、足を踏み出した。

途端、

「あちちちちっ！」

と大声で叫びながら、男は下駄の摩滅しかけた鼻緒ごと、右足を押さえた。その隙に隠は手をくねらせる動作をやめ、鳥の風切り羽のように腕を大きく広げ、露草色の鼻緒の桐下駄で地面をえいっとけり、とんぼを打った。

隠は結界を張っていたのだ。酒の飲めない年のうちに結界を張れるというのも、隠の特殊な点である。

「……」

隠は胸の前で右手のこぶしを握った。髭面がそれに気づき、

「何をしたのか知らないが……やる気か？」

隠はそれには何も答えず、下唇を軽くかんで、口の中でなにやら唱えた。

「ん？今、何と言った？」

「喪鈴……呼引」
もすず よびき

次の瞬間、隠の手から刃がとんだ。

「うわっ！」

ひげ面の男はあわてて腰から抜いたあいくち匕首を盾にして、刃先を防いだ。

突如、盗賊たちの心にぞうつと、恐怖の念が生まれてきた。

「お、お前何者だ！？それに、その武器は……」

隠の手中に、わいて出たように握られている刃物は、どうやら小型の鎌のようだ。一瞬盗賊たちはそのみねに、どろりとした血の塊の幻覚を見た。男達はひいっと叫んで、一步隠から退いた。

（幻術使いの免状を取っておいてよかった）

隠はもう一度、怪我程度で済むように傷をつけて逃げようと、切りかかった。しかし。

「お前ら！また何をやっているかと思えばー！」

その場にいた全ての人たちが雲のかなたを見上げた。なぜなら、ほんの13つとも思われる少女の声が、少々場違いなところからこだましてきたからである（その間にちらと辺りを見回して、隠は自分を助けようと盗賊に掴みかかっていた男性がいたことを察した）。

そしてふと前を見ると、どうしたことであろう、半分はひげで多い
尽くされていたであろうむさくるしい面構えの男が、まるいギヤマ
ンのような栗皮色の目で右をにらんでいる幼いおなごに変化してし
まったではないか。あれっとうろたえて隠が下を見ると、ひげ面男
が上から見下しても分かるほどの大きなこぶを頭にこしらえて、地
面に伸びていた。

「走るでっ」

少女は隠の手首をぐいと引っ張って、全速力で走り出した。

（早い）

最初はようようついて行っていたものの、隠はそんなに足が速い
わけではなかったので、すぐに息が荒くなってしまった。

（止まってと言おうか）

走りながらそんなことを考えたが、初対面の人間に口を聞きたく
ない。というより、聞けない。声を出したら呼吸困難になりそうな
勢いだからである。

隠がもう限界というところまで来たとき、女の子は急停止した。
突然止まられたので、隠はあやうくその子の狐のようなふさふさし
た一つ結いの髪を通り越して、首筋に頭をぶつけそうになった。そ
れを防いだ代わりに、勢いに乗っていた黒髪の先っぽが腕にあたっ
た。

沈黙。

「大丈夫？」

はつきりした物言いでそう問われ、肩を上下に動かしてじっとその場に突っ立っていた隠ははっとして顔を上げた。

「あんた、今、危なかった。盗賊には気をつけたほうがいいで」

息切れなど存じないといった風に、綺麗な声でその少女は話しかけた。隠はそれには答えず、のどのほうに手をやったまま、視線を下に落とした。

（呼引を見られただろうか）

先ほど隠が「喪鈴」という鎌を手に入れたのは、『呼引』によるものだ。『呼引』とは、天界にある自分の武器やそれに準ずる物を自らが発する魔力で呼び寄せるといふ、そう高度ではない神業である。分かりやすく言えば、伴天連でいうところの魔女が自分の箒を召還するようなものである。

まだ隠の左手には喪鈴がしっかりと握られている。隠は結界を張るなど高度な能力を発揮できる分、基礎的な事が異常に苦手であった。他の死神たちはいとも簡単に自分の鎌を呼んだり帰したりすることができが、隠は自分の鎌を天界へ帰らせることはできないのだ。

しかし今ここで、人間に喪鈴を見られては困るのだ。情け深いといえども死神は死神、正体がまわりに知れた時点で忌み嫌われること、まず例外はないだろう。

そんなことをぐるぐると考えていると、

「あんだ、家は？」

またまたはつとして、隠はゆるく首を振った。

「家、無いん？母ちゃんたちは？」

うつむいたまま首を振り続ける隠に、少女は拍子抜けしたようだった。

「……驚いたねえ。その紫の羽織、そうとう高価なものやろ？まさか孤児とは思わなかったわ……。」

少女はなにやらぶつぶつと考えている様であつたが、やがて晴れやかな表情を満面に浮かべて、

「せや！ すむのに一番ええとこ、あたし知つとるで！」

一番、のところをやけに強調した様子を見ると、自信に満ちているようだ。すむところに困っていた隠は、行動に素直な本音が出た。ぱつと顔をあげて、期待の眼で狐少女を見上げた。

「よっしゃ。じゃあ……」

最後にその子は、隠がおもわず、一歩後ずさりしてしまうような言葉を発した。

「走るで！」

一 不運***（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

一 不運***

「ちよいと待っててや。すぐ終わるから」

そう言われ、隠は黙ったままうなずいた。胡桃色のつややかな長いすに腰を下ろし、目を上げると、すぐそこに前掛け姿のおなごがぬれ手ぬぐいを慣れた手つきで絞っている。

その子の名は『お琳（おりん）』といった。琳というのは玉が鳴るような音、といった風の意味で、その名のとおり、凜と輝いた瞳はまん丸で、きよると動かすたびに涼しげな音がなるうかと思うほど透き通った目をしていた。

あれからそう長く走らないうちに、お琳は隠の手を引いて、「住むのに一番いい場所」へ連れてきた。すなわち、お琳の家である。

お琳の家は、人間の住むところとしてはごくごく普通のものであった。

「母さん呼んでくるわ。」

お琳はそう叫ぶと、隠が引きとめようと右腕を伸ばすか伸ばさないかのうちに部屋から姿を消し、

「かあちゃあん」

と呼ぶ声が耳に届いたと思ったら、御勝手からしゃもじをもったままの若々しい母を引き連れて戻ってきた。馬のごとき早業である。お琳は驚いている隠の鼻先に指を突きつけて、

「この子、村の賊に絡まれとったんで、連れてきたんよ。家きいた
ら行くあてがない言いおつて。どうせ居場所ないなら、うちの看板
娘にしたらどう？ めんこい奴やからたぶん……」

「しい、しい。」

お琳の母は、真っ白な指を自分の口元に立てて、娘をなだめた。

「お琳、早口であたしにはよう聞こえん。はじめからちゃんと説明
しい。それと、指。びびっとんで」

言われて、お琳は慌ててつめの伸びすぎている人差し指を引っ込
めた。

「母ちゃん、あの……」

「待て待て、お琳。いつもお琳はいそいどるな。」

「だって、追い出し……。」

口にしてしまってから、お琳はちらと隠を見た。隠は一時目を合
わせたが、すぐに視線をそらした。長い間誰も据わっていないかつた
のか、夏だというのに長いすが冷たい。ひんやりとしていた。お琳
は不安げに母の横顔を見上げた。

突然、お琳の母が笑い出した。

二人の子供はびっくりして何もいえない。特に隠は、生まれてこ
の方自分について笑った者は師匠しか見たことがなかったなので、人

間にも、このような人がいるのか、と大変驚いた。

天界の者はみな、隠に優しい笑顔を見せはしたものの、どこか抜けているような腑抜けた表情だった。あるものについては、たまたま彼女の部屋の前を通りかかった時、

「隠ちゃんは、礼儀はいいけれど、かわいくないし、愛想がないわ。一緒にいてもつまらないし、作り笑いがだんだんこわばってきちゃうのよねえ。」
というせりふと、

「悪い子じゃないんだろうけどね、」
といかにも付け足したような一文を口走った。隠は聞かなければ良かったとは思わなかったが、聞いてうれしいとも思えなかった。

だから、今ここでまっすぐな笑いを見せるお琳の母が、珍しくて、そしてありがたく感じられたのだ。

「母ちゃん？」

いぶかしげな顔色のお琳を見て、若妻は我に返ったように口元をおさえた。

「ああ、つい。おかしくってね」

目はまだ笑っている。

「何がさ。」

口を尖らせるお琳に、母はまた少し笑って、

「あんた、いつもは他人なんかすぐ放つぱりだしちゃうからね。いっつになくその子に対しては真剣だったから、」

また噴出しそうになったのか、一度息をついてから、

「明日は、季節はずれの雪でも降るのかと思ってね。」

再び顔をゆがめる母の前で、お琳がちらっと笑って、それからあわてて仏頂面を作った。

「母ちゃんったら！」

二人のやりとりをじつと見つめながら、隠は微動だにせず長いすに座っていた。胡桃色の木肌は、生ぬるくなってきた。太ももの汗が心地悪かったが、もう一刻ほど懷に居座っている足代のつり銭が無駄な音を立てそうなので動けない。ただじつと、お琳のひつつ結いの先つぽを、小さな黒目で追っていた。

『退屈だねえ』

いきなり耳元でばやかれ、びっくりして声の元を見る。

誰も、いない。首を振ってため息をつく。

（いるはずがない。あの子は、消えてしまった。）

今以てあ奴の声を空聞きしてしまう自分が、なんとも未練がましい。隠は口論を長々しく続けている二人のわき、心底自身に呆れた。あの男子の声など、とうに忘れていたと思っていたのに……。

隠をよそに繰り広げられるお琳と若い母の陽気な小競り合いは、その後五分ほどずっと、浮き世の迷い子に茶の長いすを温めさせていたのだった。

一 不運****（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

一 不運****

昼餉の後。奥歯に挟まっていたねぎとろ井のとろを口の中でもてあましているお琳と、今人気の書物『頼三神物語』の絵巻をながめていた隠は、ふとお琳のほおに米粒がついているのを見つけた。お琳の母が、お琳の好みのかたさに何時も炊いている米である。

師匠は料理をしなかった。特別めでたいときにのみ御馳走を振舞ってくれる事はあっても、普段は隠が一人で調理していた。

『料理も、なるだけ早く覚えなさい。一人暮らしをするとき、役に立つから』

その師匠の考えは、そう上手くはいかなかった。一人暮らしのできる大人と違い、隠は幼い。一人きりの料理というのは、子供の心にはひどく堪えたのだ。

ふつと息をついて、まぶたをあげる。と、隠の目に、涼しげな音を立てる何かが目に入った。隠はそれに見覚えがあった。

（風鈴……）

金魚柄のガラスが、風につつかれて軽く揺れている。ちりんちりん可憐な音を立てる風鈴が、不意に隠を、思い出たくもない悪夢のようなあの日の記憶に巻き込んでいった。

「なばりちゃん」

そうやってかれは、村人の目を盗んでは脱走して私のところへ会いに来た。

村で黙認されている隠し子に会いに来ることは、ご法度に触れることだった。発覚したならば、まずよほど身分の高いものでなければ死を免れることは難儀であった。

でも、彼は会いに来てくれた。子供ながらに命がけだった……。

「なばりちゃん、今いる？」

その日の少々はしゃいだようなその子の声に、ああ、何かいい事があったんだな、と私は察した。

「いるよ。あがつてきてよ。」

数秒待った後、ヒノキでできた鴨居の障子に、小さく髻を結った細い人影が写った。すーっと音を立てて、襖が開き、こめかみのところ髪を余したかわいらしい童顔がひよこと現れた。

「なばりちゃん、久しぶり。」

無邪気な笑顔が、私の心をふわっと軽くした。いつもあの子の笑った顔をみて、少しだけ隠れ暮らしの苦しさを心のおくから消し去る事ができた。わたしの頬の緩むのを見て、彼は――朱眼しゅがんは、もう一度私の名を呼び、手中になにやら重そうに抱えて、扱いづらそうに足袋を脱ぎ、そそくさと私のそばへ寄ってきた。

「なばりちゃん、今日はね、僕ね、あのね……」

「しいー。」

私は朱眼の口元に一本指を立てた。

「お師匠様が隣の部屋で寝ていらっしやるの。ここにいるのが知れたら、たいへん」

朱眼はあわてて、左手で口を押さえた。

「ごめんね。今日、なばりちゃんにいいものもってきたの」「本当？」

思わず声が上がった。外の物にあまり関わりをもてなかった私にとって、井の外の品々はとても珍しい。だから、隣の部屋でお師匠様の寝返りを打つ音が聞こえたときは、本当にびっくりした。

「……お師匠様、寝てる？」

朱眼は恐る恐る私に尋ねた。私はそっと障子を開けて、中の様子を伺った。

「……大丈夫みたい。」

「よかったあ。ときどきしちゃった。」

朱眼は大げさに胸をなでおろし、それから真顔になった。

「それじゃあ、あけるね？」

朱眼は握っていたいびつな形の半紙を、狐色の柔らかな手でそつとあけた。

「わぁ……」

「きれいでしょ？」

私は無言でうなずいた。なんとも説明しがたい形のガラス細工だった。おわんのような形をしていて、赤い魚の絵が描いてある。

彼が言うには、これは「風鈴」といって、外側のお皿をひっくり返したようなガラスに、内側からつるされている短いお箸みたいなガラスがぶつかって、綺麗な音をだす楽器のようなもの、ということだった。

「でも、お皿が割れちゃったときは、ガチャンって耳に響く音がするよ。」

わたしが半信半疑なのを感じたのか、朱眼はちらつと笑って、

「いいから、静かに鳴らしてごらんよ。そうつと。」

そう促されて、私は左右に小刻みに、フウリンをゆすった。

チリーン……

「っ!!」

（この、おと……!）

心臓がばくばくばくと鳴り出した。どうしたの、と朱眼が顔を覗き込むと同時に、複数の人間の足音が、玄関のほうから聞こえてきた。「え？」

朱眼は愕然として音のするほうを振り返った。

乱暴に襖が開いて、ヒ首を片手に、大勢の男達が乗り込んできた。

「辞めて……殺さないで」

「早くこっちに来い！」

「なばりちゃん」

「やめてっ、おねがい」

「こいつが何をしたのか分かっていつているのか!？」

「死刑だ、死刑！」

「なんの騒ぎだ・・・？」

「金武丈様、お昼寝のところにこの小僧が」

「なんだと？」

「ごめんなさい、ごめんなさい」

「この風鈴は何だ？」

「だ、だめえっ！」

「壊せ！外からの手土産のつもりか？汚らわしい」

「隠、何かされていないか？」

「今すぐ殺してしまえ！お上からの命令だ」

「やめて、朱眼は何もしてない」

「今のは呼び鈴だろう？怖かったから

鳴らしたんだろう？」

「違う・・・ちがう！」

「じゃあ、やつちまうぞ！」

「ああ、さっさとしろ」

「いや・・・なばりちゃ……」

「やめて、まってよおねがい」

「こいつをかばうんならお前もそれ相応の罰を受けるぞ」

「それはひどい。この子は何もしていな

い」

「朱眼だって悪いことは」

「言いわけを聞くな！早く刺せ」

「やめて……やめて……」

いやあああああつ！！

一 不運*****（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

一 不運*****

「寒くないん？」

隠はわが身がびくんと震えるのを感じた。いつの間にか風は、風鈴をなでるのをやめていた。はつとして、隠はもう一度、お琳の家の風鈴を見た。風は先ほどよりも強まっている。しかし風鈴はうんとすんとも言わない。

（この風鈴、本当に鳴っていたのだろうか）
つかの間そんなことを考えて、隠は二の腕に鳥肌がたつのを覚えた。

「あんた……どうしたん？背中、汗ぐっしょりやけど」

お琳はそう言って手を伸ばしつつ、ぼうつと突っ立っている隠が何を見ているのかに気づいたらしく、

「ああ、風鈴な。見せたるわ」

と笑った。お琳の器用な指先が、細い横柱に巻きついていて、そうめんのような糸を、不思議なほどするりとほどこいた。

「ほら。」

その風鈴には、赤い金魚の柄などどこにもなく、代わりに大きな打ち上げ花火がひとつ、はじけるように描かれていた。さらに、おわんの形をしたガラスが、紺になっていた。内側から絵の具を塗ったらしかった。

「可愛ええやろ？」

風鈴はお琳の手のひらで、少し赤みを帯びてきた日の光を浴びて、まぶしく光っている。

「この風鈴はな、あたしのおじいちゃんが、おばあちゃんに贈り物したものなんよ。」

隠の視線が、風鈴からお琳の顔に移動した。お琳はふつと笑って、
「あたしのおじいちゃんとおばあちゃんはな、恋で結ばれたんや。」
お琳はそう得意げに、しかしどこかさびしそくに話し出した。

「縁ってというのは、不思議なものでなあ。おばあちゃんがさびれかけの茶屋で働いているところに、偶然通りかかったのがおじいちゃんやった。おじいちゃんは、骨身惜しまず働くおばあちゃんに、一目ぼれしよったんや。」

一目ぼれ、と隠は口の中で唱えるようにした。

「ほんで、おじいちゃんは二週ほどその茶屋に通い詰めて、毎日いっぱい茶さ出してもらって、とうとうあんたが好きやといいたい思うたんやろうに、この風鈴わたしたんよ。」

隠はその境遇が、過去の自分にそっくりなのにつらたえた。

「きれいなまとまりやろ。」

「恋は盲目……」

「え？」

隠はゆるく首を振って、風鈴から視線をそらした。

もし、どちらかが片方のことを忘れ去ってもいたならば。

そうしたら、失うものなどなかったはずなのに。

縁など皮肉そのものだ。

私のせいで、彼は死んでしまった。

もう、笑って生きることなんてできない。

だれも、

誰も私の声なんて聞いてくれない……

苦しい。

心を開けずに生きることなんて、意味はあるの？

どうして死ななければならなかったの？

どうして目の前で彼を殺したの？

ひとり。

私はひとり、色の無い光に取り残されてしまった……

「どうかしたん？」

今更、言い知れない恐怖が、隠を包み込んだ。

「！」

一瞬、心の臓が凍ったように冷たくなった。あついものがそこより上のほうへ、盛り上がるように頭を突き出そうとしていた。そのあたたかさを無理やり下へ落とし込み、一歩歩いてため息をつく。

「隠？」

心配そうな声をあげるお琳に、隠はまた左右に、今度は勢いよく首を振った。発言という行動そのものを拒絶した。再度、短いため息をつく。

声など出していないはずなのに、吐息はかすかに震えていた。

一 不運*****（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

二 過去を通えし者

夕飯前、杓文字を上下に振って、鼻歌交じりに御飯の炊けるのを待ちぼづけている母の炊事姿をぼんやり眺めながら、お琳はさっきの隠の事を考えた。

『恋は盲目』

初めて隠の声が聞けたのに、その言葉はお琳に距離を感じさせた。（めんこい顔して、切ない事言いよるなあ。）

恋煩いでもしとるんやろうか。とお琳は体育座りをして、足の指をくねくねやりながら、そうだったら厄介やなあ、と呟いた。

（あたしと恋は、縁がないからなあ）

しかしあの無口な隠が好きになるのだから、相当な美男か優しい人に違いは無いだろう。幼馴染だったら面白い。それとも祖母達のように、一目ぼれがきっかけか。お琳は暫しの間、隠の恋相手について勝手に想像を繰り広げていた。

ふと顔をあげると、目の前に母の整った顔が自分と対面していた。

「ひゃああつ！」

驚くお琳の頭を、笑いながらそつと撫でた母が言うことには、

「あの子の事、好きなんやね。大事に思ってる」

お琳は小さく唸って、ちよつと頷きかけて止まってしまい、泣いている人の様になってしまった。

「ええ友達になれる？」

「うーん・・・」

母はもう一度ちらつと笑ってから、

「大丈夫や！あの子はちよつと大人しいけど、真っ直ぐで、素直で、後ろ向きじゃあない。きつと本当にいい子なんよ。」

「そうかあ……そうなんかあ。」

母がゆっくり頷いた。その途端、釜が泡を吹く凄まじい音がした。母は米の様子を見に、慌てて火へ戻った。

「したら、なんか仲良うなるきつかけとか、ないかなあ。」

あつつ、あつつと騒ぎ立てながら火傷未遂と格闘する未熟な母の傍ら、じっと考え込んでいたお琳の頭に最終的にひらめいたのは、生まれたときからの顔見知りである幼なじみ、大親友の顔であった。「そうや！あの子に聞いてみるんが一番の早道や！」

お琳は心の中で、翌日にでも家を訪問しようと企てて、一人でそつと笑みを漏らした。

二 過去を通えし者

隠が目覚めた頃、お琳の母はお勝手に昼餉を作っていた。はてなと思つて、野良猫用の裏口から外を見てみれば。日はとくに頂上へ昇り詰めていた。昼までぐっすり眠つてしまったらしい。隠は、これはきつと、昨晚緊張して寝られなかったせいだと思い込むことにした。

「あ、おそよう。」

お琳は母と一緒に揚げ物を作っているらしく、手の平をパン粉だらけにしながらそう言った。

「顔洗つてきい。手ぬぐいは右にかかっているから」

お琳の母の言葉に頷いて、隠はくるりと台所に背を向けた。瞬間、また振り返った。

「どうかしたん？」

「洗面所……」

お琳は一瞬、拍子抜けした表情になり、それから

「ああ、ごめんごめん。その扉を開けて……ああそう、そこそこと教えてくれた。」

さて洗面所についた隠は、たらいを目の前にして棒立ちになっていた。奇妙な金具がついていたからだ。

自分の庵に似た家とそう変わらない洗面所なのに、その銀色の十字だけが違った。

（これは何だろう）

見てみたところ、何かのネジのようだった。

（どうしてこんなに回しやすくなっているんだろうか）

出来心でそれをくいとひねった隠は、そこから水があふれてきたのに度肝を抜かれた。

（水がひとりでに出ている）

流れ出ている水をぽかんと見ていたら、

「何やつとんの！もったいない事せんといて」

お琳は水を隠の顔にぶつ掛け、手ぬぐい（つつじの香りがした）を隠のかおにゴシゴシやり、櫛で髪をとかしにかかった。

「蛇口におどろいたん？」

「ジャグチ」

隠は視線を泳がせた。

「その銀のやつ」

ゆるくうなずく隠に、お琳は大笑いし始めた。あっけに取られている黒い瞳に気づくと、

「それはな、母ちゃんがお金ためて、やっと買ったものなんよ。ひねると水がでてくる。魔法みたいな話やな。」

と言って、また櫛を掴んだ手を動かし始めた。

「お琳、早めにね。昼餉時やよ」

「はあい。」

それから隠が、人間界に来てから初めての揚げ物を食べるのに、そう時間はかからなかった。

二 過去を通えし者（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

二 過去を通えし者*

それはちょうど、母と同じ部屋でお琳と隠が温泉饅頭を食べながら花札をしている時にやってきた。

「おりーん」

縦棒一本では表せないほどの長々しい声に、お琳がぱつと畳から立ち、ろくに物も飲み込まずに戸口へと駆け寄った。がらと扉が開く音と同時に、お琳の母が尋ねた。

「どなたー？」

「おすいです、遊びに参上しましたー！」

聞き覚えのない声だったので、隠は微妙に恐れを抱いた。

お琳のからんと開けた性格のおかげか、この家では一夜、気を張らずに過ごせたものの、未だともに会話はしていない。人間不信が克服されたわけではないのだ。

「お邪魔しますあす。」

（家へあがってくる！）

そう思うより先に、体が動いた。

ガタッ

「隠ちゃん!？」

隠は光の様に畳を立ち上がり、襖を押し開け、そのかげに隠れた。

(怖い)

怖いのは、「おすい」ではない。こんな行動を取ってしまう自分の心が、隠は怖かったのだ。他人に不慣れであることは自覚していた。だが、ここまでひどいとは思っていなかったのだ。

「あれ、隠は？」

母がおりんとことんあやふやな説明をしている間、隠は何かが近づく気配をそれとなく感じ取った。

(おすい、だ)

隠はきゅうと肩を締め、自分の中で自分を小さくした。そして、隠はハッとした。

同じ香りがする。この子の髪、私の髪と同じ。伊草と、土の香り。そして、かすかな……影の香り。

隠は死神、要するに神も同然。影の香りを感知するのは、自然的に備わった神としての素質のひとつである。

(同じ影のにおい。)

それは、『おすい』が隠と似通った過去を持つ証であった。

「人見知り？」

たたみに映った『おすい』の影が。自分に向かって口を利いた。隠は恐る恐る面を上げた。

そこには、自分とは似ても似つかない、陽だまりのように暖かな笑顔があつた。

「あたし、おすい。お琳の幼馴染だよ。どうぞよろしく」

自然と差し出された、白くて細長い手を、隠はそつと握つた。強く握つたら簡単に折れてしまいそうな、細い手。夏の半ばだというのに、おすいの手はまったく日に焼けていない。

隠が手をはなすと、おすいは弱弱い容姿とは裏腹に、勇ましくにかつと笑つた。それを見てお琳とその母も安堵の息を漏らした。明るい笑い声が、部屋を満たした。

（この人たちとならば、私は。）

私は、大丈夫かもしれない。隠はふるまのへりから汗ばんだ手を離した。

瞬時、不安と一緒に別のものまで吹っ飛んだ。

（あれ）

「隠！？」

お琳の手が背中に当たった様に感じた。視界がゆがんで、一筋の

光も消えて……。

隠は、気を失った。

二 過去を通えし者**

お琳の母曰く、隠は熱を出したらしかった。母は握力が弱いのか、寝ている隠の額に乗せてある濡れ手ぬぐいからしょっちゅう滴が垂れてきて目に入るのだが、そうでなくとも視界がかすむ。

隠は生まれてこの方寝込んだことはなかったが、お琳もおすい（お穂と表すらしい）もそれほど焦っている様子はないので、眠っていれば治りそうだ。

そう考えて隠は、お穂の手から粥を受け取った。

「よく食べますね。」

お穂は昨日から家に泊り込んで、隠の看病をしてくれている。薄桃色の生地に金で縁取りされた桜が散っている色鮮やかな着物と、一等物の帯から、どこか金持ちの家の子の雰囲気を感じた隠ではあったが、なぜ上流の人間家庭が、お穂を隠の影と同じ香りに――隠し子にする必要があったのか、聞くことはできなかった。もし自分がそれを尋ねられたら、解らないとしか答えられないだろう。隠し子はその理由を改まって聞かされる事など、きつとどの世界でもないのだ。それに、言ってもいない事を隠が知っているとわかったら、怪しまれるのが当たり前である。

ただその華やかな着物と、お琳の段鹿の子が並ぶとき、隠は心の奥に言い知れない疑問が浮き出るのであった。

「それで、前から聞きたかったんだけど、隠ちゃんはどうしてここ

に？」

隠は、お琳ならとくにお穂に話していると思ったので、ちょっとびっくりした。

「……え？覚えていないの？」

お穂は納得が行かないという顔で、しばし宙を見た。そして、

「隠ちゃんて、しゃべれないの？」

真顔でそう尋ねられたが、隠はお穂を視界からはずしてそれをごまかした。お穂はふーんと軽くうなづいて、わからないという風にしきりに首をかしげながら、しずしずと部屋を出て行った。

扉の閉まる音。まるで、あの子が消えたときに閉められた戸の音のよう。この音は、隠を現実の幸せからしめだしてしまう、悲しいささやきの一片であった。

隠は頭から布団を被った。

話をしたら好きになってしまいかもしれない。

一緒にいたいと思う人ほど、目の前から姿を消してしまう。

私はもう、運命に裏切られたくない。

だから、もう誰とも口なんか利かない。

……こんなのがまmanaの？

これからも次から次へ、運命は私の逆十字に釘を打ち込んで、

ひっくり返すことのできないおもりを背負わせるの？

もう誰も好きになんかならない。

私は信じられるものがない。

……自分でさえも。

だってあの子を消したのは私自身だから。

誰かに、誰かにこの苦しみをわかってほしい

でも

思いついてくる名は、もういくら呼びかけても届きはしない、幻と化してしまった存在。

無に話しかけるなんて、つらすぎる。

だから、

もう誰も私の中に入ってこないで。

失うことは、怖い。

こんなに残酷な世界で、どうして人は生きてゆけるの？

掴んだのは、何もない空虚な空間。

手に入れることができなくて、

まるで幸せのよう。

………砕かれてしまった、私の中の感情。

もう二度と取り返せないかもしれないのに。

私は未だに、それを求めているというの？

もしそうだというのなら、

いつそのこと私ごと消してください。

もう、心えぐられ引き裂かれるような思いをしなくてすむように。

臥所の傍らに置かれた粥の湯気が、ゆらりと消えた。

（どうして人と目を合わせられなくなったんだろうか）

布団を顔からはがすと、目の前の白い天井が、なぜか一瞬粥に見えた。隠は横目で、もう湯気が立たなくなった茶碗を見た。早雲色の陶器に、茜色の花が点々と描かれている。

（綺麗な花）

初めて姉達の住む神殿に移動したときに、中庭に植えてあった詠紋の花に少し似ている。隠は神殿は嫌いだけれど、そこにある植物は好きなので、風景をよく覚えていたのだ。自分を省いて末っ子に当たる姉妹の部屋に、一輪挿しにされていたのがその花だった。

「隠、起きとる？」

すーっと襖が開き、ひよっこりお琳が顔を出した。

「ああ、起きとった。体調はどう？ 起きとって大丈夫なん？」

お琳はそばまで来ると、隠の額の手ぬぐいを外し、代わりに自分の手のひらを当てて熱を計った。

「ああ、そうや。お穂はどう？」

隠はさっきの事を思い出して、ちよつと眉根を寄せた。その目の淋しそうな色に気づいたのか、お琳が

「あんたは、昔のお穂によく似とる。」

「似てる……」

「うん。……人見知りがひどいことか、な。」

お琳は出窓の竿に、手ぬぐいを干しに立った。

「初めて会ったときが一番しんどかったなあ。お穂は他人が怖いから、誰かの背中後ろに隠れたがった。けど、ひどいもんでな、あ

いつが一番きらいなのは、母親やった。だから、お穂は納屋……たまたま戸の鍵が開いていたうちの家の納屋の暗がり隠れて、そこからでて来んのや。ほんで、外に出てからいつとう最初にしゃべったのが、あたしやった」

お琳は、お穂が自分の生い立ちを隠に話したと思っているらしかった。

「まあ、こんな暗い話どうでもええやろうけど、あたしなんとなくこう思うことがある。」

お琳は隠の布団の横に腰を下ろした。

「もしかしたら、お穂は隠の未来の姿かもしれへんな、て。」

隠はうろたえた。正直、お穂は嫌いなわけではない。しかし、同じ隠し子という過去と、あの豪華な身なりがどうしても結びつかず、共感できないのだ。あれはなりたいたい自分ではないし……それに。

「私は……」

「ん？」

「私は、別に、しゃべれない訳じゃ……ない」

お琳はこれにちょっと驚いたような色を見せたが、口端をあげる
と、

「わかつとる。」

と言い聞かせるようにして、隠の額を指先でとんとんと軽くつついた。

「じゃあ、ちゃんと休むんよ。」

隠がうなずくのを見てから、隠は静かに出て行つたが、ふすまを最後まで閉めていかなかった。締め出しの音が耳に入ってこなかった。隠は心が穏やかになるのを感じた。

突然、野太いおじさんの声が家の中に響き渡った。

「お手紙です」

隠は心臓がひっくり返るかと思うほど仰天したが、家の中の人たちはみな腰を抜かした様子が伝わってくるような声は上げなかった。

「お琳、お願い」

「はい」

落ち着いた足音が玄関へ向かう。

「あ、こんにちは。どなたからですか？」

「えーとですね、そのですね、えへん、」

えへんを口で言う必要があるのだろうかと思は真剣に考えはじめてしまった。

「町内会の上のほうの方から、例の毎年のやつをですね、開催しま

すというですね、お便りなんでしょう、ハイ。」

男の声は飽き飽きするほどモロモロな説明を終えると、人より少々大きめと思える足音で、去っていった。

「ああ、もう。手紙もらってない」

お琳の日より下駄が、せつかちな男を追いかけていった。

二 過去を通えし者**（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

二 過去を通えし者***

夜闇も深くなってきた頃。昼間に沢山眠ったせいかなかなか寝付けなかった隠は、ちようどうとうとし始めたところで誰かが畳を踏み音を聞いた。

（誰だろう）

隠は布団の中で小さく縮こまった。隠は死神のくせに幽霊を見ることができない。おまけに暗闇が苦手ときている。

（お琳だったらしいのに）

と考えた直後、お琳ではないと気付いた。昨日の夜、お琳は掛け布団を頭から被った直後、さっさと夢の世界へ行ってしまったのだ。朝はあの若い母より早く起きるそうなので、熟睡しやすい体質なのだろう。

足袋と畳がする音。だんだんとこちらに近づいてくるので、隠は更に丸くなった。

突然、耳元に吐息がかかった。わざと吹きつけられたように感じた。

「なばり、ちゃん」

隠は布団のなかで思わず『えっ』と声を上げた。

一人だけ、自分をそう呼んだ。あの子。まさか。

「あああつ！」

小さく悲鳴を上げ、倒れてくるものを両手で受け止めようとした瞬間に、まるで幻術が解けたかのように顔が変わった。

近づいてくるものの正体は、隠の額の手ぬぐいを取り換えに来たお穂だった。

（そういえばこの人も、私の事をそう呼んだ）

「驚いた？ごめんね。」

と言いながら、お穂は表面が乾きかけていた額の手ぬぐいを外した。耳のところに硬い物が触れた気がしたが、きつとお穂の振袖だろう。取り替えた後の手ぬぐいはひんやりしていて、隠は思わず目を細めた。外でひぐらしが、しつこい程に鳴き続けている。

「体、早く良くなるといいですね。」

隠が顔を背けた。するとお穂は、はあっと半ばあきれたような溜息をして、速足に部屋を立ち退いて行った。扉には、手もかけなかった。

次の日、お琳が起こしに行った時、戸は閉まっていた。

「おはようさん」

動いている気配を察したのか、お琳が外から声をかけた。

「入ってもええか？」

隠は布団を畳みながら軽く頷いたが、部屋の中にいないお琳にとってはかなり無意味な行動である。

「入るで」

勢いよくふすまを開け放たれ、ちょうど敷布団の白い覆いを外し終わった隠とお琳と目があつた。お琳は腕を組み、頬をぷくつと膨らませて、

「入っていいかわからないやろ。返事ないから」

隠は怪訝そうな顔をした。が、その表情はお琳の目には止まらず、二人は敷布団を畳んで押し入れに投げ入れた。

「どれ、熱は……」

お琳は立ったまま、隠の額に手を当てた。ハトの様に首をかしげて、それから力強く頷いた。

「うん！もう大丈夫や！」

隠はほつと安堵の息をついた。これからはもう、寝たきりでなくていいのだ。せっかく人間界へ研修をしに来たのだから、横になつたまま過ごすのは勿体無い。

（考えたくはないけれど、いずれ去る時が来る）

それまでに成し遂げておきたいことが、隠の胸裏で温められているのだ。

久々に皆と囲む食卓は、いつもより明るく見えた。

「熱、下がってよかったなあ。」

お琳が鮭の西京漬けを口に運びながら自分もうれしそうに言うので、隠はほんのり顔が熱を帯びるように思った。木の芽田楽をかきこむ。

「ごちそうさまでした。では、私はこれで」

空になった食器を手にお穂が席を立った。

「ああ、ありがとうお穂ちゃん。いろいろ助かったわ」

「とんでもない」

若いお琳の母に笑顔で会釈し、お琳と隠にあいさつを済ませて、お穂は半回転するとそそくさと自宅へ去って行った。百合のような甘い香りがしばらく廊下をたなびいていた。

後続くように隠も膳を下げようとして、ふとある張り紙が目に入った。流しに皿を置いてから真ん前にいつてまじまじと見入る。

『人間の祭は神の祭りとは似ても似つかない物だ。堅苦しい儀式の代わりに、盆踊りを催し、人々は楽しそうに出店を巡る。』

隠は師匠の言葉と、それを聞いて心が跳ねるような心地を思い出

した。

「夏祭り……」

と呟いて、隠は張り紙を指さしながらお琳の顔を窺った。

「ああ、あれ。毎年母ちゃんとお穂と三人で行ってるお祭や。五十年前からずっと立つとるえらい大きゅうて立派な神社なんよ。ザラメの氷が名物で。」

「ザラメの氷」

「甘くて冷たい菓子あまひょうの事や。甘氷がほんまの名前らしいけど、ザラメの氷の方が、難しくなくてええしな。今年は隠も一緒に行こうや！」

早くもはしゃぎかけているお琳に、隠は何か言おうと口を開いたが、何かに気づいたように切ない顔で首をゆるく振った。

「え……なして？ 隠、お祭り嫌いなん？ もしかして、冷たい物は苦手か？ でも、盆踊り踊ったりできるし、普段着ない派手な浴衣も着れ……」

「お琳！ 父ちゃんからお手紙——！ 今勝手口から仕事仲間の兄ちゃんが届けてきちょん」

お琳の母がそれを言い終わるか終わらないかのうちに、お琳は勢い余って隠をふっ飛ばし、母もろともに手紙の横をすり抜け、柱に頭を打ち付け、大いに痛がりながら戻ってきた。

「父ちゃん帰ってくるん？帰ってくるん？」

まだ読み書きもできない子供の様にそう繰り返すお琳に、母が封筒を渡した。お琳は最初、何も考えずに封筒を読もうとした。それから気付いて中をのぞいたが、中には何もない。母の手元を見る。

「母ちゃんったら！」

いつもの姉性分には珍しくすねてしまったお琳に、若母はあわてて二枚ほど重なっている紙を手渡した。手紙を見てもいいか聞こうとお琳に近寄った隠は、母がこっそり笑っているのを目撃した。

お琳の母は、本当に素直に笑う。それはまだ若くて人生経験が浅いからなのか、それとももう色々悟った後だからこそなのか、それはまだまだ子供の隠にはよくわからない。しかし母の笑い声は、ちゃんと明けた様に思えた。聞いていて心地よい何か自分の持っていない、何かがあった。

「夏祭りの日には間に合うように帰ってくるらしいで。」

やっと笑いが収まった母がそういうと、お琳は

「ほんまかあ。父ちゃん帰ってくるんだ……」

と、喜ばしい知らせにぼうっとしている。手中の和紙を見つめて、しばし。

隠はその場を離れた。

（また知らない人が近くに来る）

つかの間そんな事を考えた自分が、後ろ暗かった。

*	*
□	□
*	*
□	□
	*
	□

手紙に書いてあった事は、本当だった。昨晚、お琳の父が、汗で覆われた顔を表玄関からにゅうと出してきたのだ。よりにもよって隠が、部屋の中に迷い込んできた一匹の蚊を追いだそうと扉に手をかけた瞬間であつた。

「帰つたよ」

観音開きの扉が前触れもなくこちらがわに開かれたので、隠はあやうく鼻の頭を戸の角にいやというほどぶつける羽目に陥りかけた。

「おかえりなさい。」

母が奥から出てきて笑みをもらしたが、すぐに後ろを振り返つた。

「でも遅かつたわ。お琳はとつくに寝てしまつてな」

「そうか……。よし、とりあえず晩飯が食いたい。」

お琳の父は妻に渡された手ぬぐいで足を拭いた後（とつさに扉の陰に身をひそめた隠にはそう見えた）、後ろ手で扉を閉めようとした。

父の大きな掌は、隠の細い髪をつかんだ。

「おや、何かな」

小さく声をあげた父の視線の中にあるのは、明らかに隠の黒い瞳だった。しかし、どうしたかと声をかけるお琳の母に夫は、

「蚊が一匹いたよ。出て行っただけだ」

と言って、網戸だけをかけて家の廊下を進んでいった。二度は振り返らない。

隠はわけがわからないまま父のがつしりとした体を見送った。そのあと、秋風のようにすると抜けて寝室へ向かった。

お琳はとうに寝付いていた。結った髪をほぐすのを忘れて、そのままになっている。

隠はお琳の眠りを妨げないように、そっと髪留めを解いてやった。

(どこに置こう)

きよろきよろしていた隠は、もう片方の手が台に当たるのを感じた。掌でそつと感触を確かめると、これは隠が初めてこの家に来た時に座っていた、あの長椅子に似ていた。

「……もう寝てしまってるかもわからんわ……」

「顔だけで……」

隠は布団に入った。どうやらお琳の母が、父に隠のことを知らせようと寝室へ来たらしい。

無言でふすまが開けられる。瞼を閉じたままでも、父が手燭を持っているのがわかる。

「ほう、この子は……」

「なかなかかわええやろ？ めんこいから、看板娘にしようなんてお琳が引つ張ってきたけど……お琳はもととそんな気、なかったんね。」

（そういえば最初、そんな事を言われた気がする）

「ほほう。」

父は、帰りしな隠に会ったことは言わなかった。

「で、この子の両親は何と？」

「おらのやって。お琳が聞いたら首振ったんやって。」

「えっ、じゃあ……家がないのか？」

「今のところは。まあ、お琳に新しい友達ができて良かったし、追い出そうなんで気はあたしは起らんと思う。今も、これからも。」

隠は耳を疑った。

何故？ 何故この人たちは、ためらいなく私を受け入れるの？

みんな私をはじきだした。

みんな私を隠していた。

みんな私が見えていないふりをしていた。

何故この人たちは、私をはつきりととらえる？

……わからない。

何故、この人たちはこんなにも堂々と前を見据えている？

受け入れてはいけない。

私を、受け入れては駄目なんだ。

二度と、同じ思いはしたくない。

自分のせいで、だれかが幸せの崖から突き落とされる夢を見るのは、

もう一度そんな事がおきたなら。

私はきつと、壊れて（死んで）しまっただろうから。

私はきつと、死んで（消えて）しまっただろうから。

二 過去を通えし者***（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

三 瓜二つ

その日珍しく早朝に目を覚まし、なかなか寝付く事ができなかった隠は、ふと人の世の日の出を見ようと思い立った。よく考えてみると、お琳の家に居座ってからまだ一度も寝坊しなかった日が無かったのだ。

とりあえず着替えようと、隠は衣紋掛けに手を伸ばした。

寝室には行灯の隣に三つ衣紋掛けがあり、常は左から母、お琳、隠と着物が並んでいる。しかし、今日は勝手が違った。あれつという風に動きをとめた隠の目の前には、いつもの藍色の菊柄とは似ても似つかない、金魚の浴衣が反物のようにきちんとかかっていた。それを見たお琳は思わず笑い声をあげそうになり、あわてて布団を口に押し付けた。

（やっぱり、びつくりしとる。）

隠は自分の着物をさがしてキョロキョロしたが、当然敷布団の裏にはりついていっているなんてことはなかったため、隠は仕方なくその見知らぬ浴衣の帯を手についた。そして隠が帯をきつく締め、手ぬぐいを右腕にさげて洗面所へ向かうまで、お琳は必死に掛け布団で自分の鼻と口をふさぎ、噴出すのを抑えなければならなかったのだ。

三 瓜二つ

「おお、今日はいつになく早起きやんけ。」

けろっとした顔でお琳は隠にそうだったが、隠はけろっとはして
いなかった。神界から持ってきた、金武丈老人からもらった大事な
着物が何処へ消えてしまったのである。

「着物……」

しかし、最後まで言い終わらないうちに、

「おや、こんにちは。」

と後ろから声がかかった。

「父ちゃん!？」

振り向きざまにお琳が固まった。手に持っていた黄色い縁取りの
手ぬぐいが静かに床へ落ちた。

「おお、お琳。すまないね、昨日は井戸端会議が長くなってしまっ
て」

「父ちゃん、昨日はいなかった……。」

お琳の耳には、父の言葉はまったく入ってきていないようだ。

「今日の朝帰ってきたん!？」

「いや……」

「すごい！父ちゃんが朝に帰ってきた！」

「ええと……」

「いつもは寝てるのに！」

「お琳、」

必死に言い分けをしようとする父からふと目をそらして、隠は母が壁から顔を除かせてひっそりと笑っているのを見つけた。

（何を笑っているのだろうか）

母が隠の視線に気づき、微笑みかけてきた。隠はぱっと下をむいた。

いまだに顔を合わせることできない。ただ母の笑顔はやわらかくてむげにはしたくないので、ごく浅い会釈を返した。

「朝っぱらから大騒ぎやね。」

「あ、母ちゃん！今朝父ちゃんが帰ってきたよ！」

「はいはい。」

母は二人に近づくと、先程お琳が取り落とした手ぬぐいを拾って夫を見上げた。父は野うさぎのようにぴょんぴょん跳ぶお琳の頭をなでながら、

「お篠も大変だっただろう？子供一人……いや、二人を世話して。」

「二人ともいい子にしてくれて助かったわ。なあ、お琳」

「勿論！あつ、あかん、朝ごはんの準備がまだやったっけ」

「とつくに作つといたわ。今日は特別な日やから、一日くらい楽しんで。」

お琳は礼を言つて食膳のふちに引つ掛けてある馴染みの前掛けをつかんでお勝手へと入っていった。母も配膳に取り掛かる。父は何も言わず、くるみ色のつややかな椅子に堂々と腕を組んで腰掛けた。

隠はいつもは食事の準備ができてから目を覚ますので手持ち無沙汰になつてしまい、おずおずと席についた。上目使いに父を見たものの、父のどこか複雑そうな遠い目を見ると、家の雰囲気の変化が大分感じられた。

「あ、そうや。隠、浴衣の着心地はどうや？ 氣に入ったか？」

言われて即座に思い出し、着物の場所を尋ねると、お琳は

「内緒。この前あんた、祭に行きとぅないって言つとったから、無理矢理に引つ張つていこうと思て。すまんすまん、それは隠の、お祭用の浴衣。」

「お琳。父ちゃんの箸、逆になつてる。」

「あつ、ごめん。」

華麗に受け流されて、それ以上問えなくなってしまった隠であったが、

「そうか。今日は祭りか。」

という父の一言ではつとした。

「お琳……」

「ん、どうした？」

干瓢の小皿を食膳におきながらお琳が答える。

「祭……行けない」

言った途端に、部屋がしんと静まりかえってしまった。母の豆腐を切る手が止まった。

（静かになってしまった）

しんとした空気。お琳の家でこれほど似合わないものはそう無いだろうと隠は思った。

「隠。」

お琳の顔は動揺していた。あの透き通った丸い瞳が、自分の顔をゆらゆらと見つめている。

目が合った瞬間、隠は無意識にふいと視線を宙に泳がせてしまった。

（目が……）

「何か遠慮でもしとるんやったら、いらん事やで。」

（目が、合わせられない）

「……隠、一緒にお祭行こう」

隠は黙って首を振った。

（お穂は私の事を好いてはいないから）

お穂がああの夜中に残していったため息、半ばあきれたようなそれは、隠に何かを伝えていたように感じた。

「隠ちゃん……人混みが苦手なんとちゃう？」

無理強いはよくない、と言いたげな目を向けた母に、お琳が八の字になった眉を見せた。

「そないなことないわ。隠は市が好きなんや。」

（市？ そんな事を言っただろうか）

そう思つてよくよく考えてみると、ふと思ひ当たつたのは、盗賊に襲われたところをお琳に助けられた市であつた。

（違つのに）

「そや！隠。その浴衣が何なのか知つとる？」

とまどっている隠にお琳が突然、目を輝かせてそう尋ねてきたので、右手を上げて振袖を見るが、はてなんの変哲もない布である。隠はわからないという顔をした。

「その金魚の浴衣はな……」

いたずらっぽいろをした目がくると回った。もったいぶって言葉が続けようとしたお琳より先に、母が台詞を継いだ。

「お琳が隠ちゃんくらいの年のころ、お祭に着て行っていた思い出の浴衣なんよ。」

隠がびっくりして思わず母の方を見ると、母はその視線に答えようとしたのか、豆腐と菜切包丁をそつとまな板において、隠の方に向き直った。

「隠ちゃん、お琳はな、夕べ……夜の闇が深う深うなった時に一人で起き出して、ほつれた裾を繕ったものなんよ。」

（お琳）

勢いよく振り返った隠。真っ直ぐに伸びた黒髪が風に逆らって散らばる。お琳はあわてて、

「ちょっと、かあちゃん！それは……。」

と身振り手振りよくわからない動きをしたが、母はふっと笑って、

「いいやないの。あんたは五人でお祭行きたいんやろ？」

（そこまでしていたなんて）

隠の決心がかすかに揺らいだところで、

「おりーん！」

玄関から聞き覚えのある声が響いてきた。

「おじゃまします！」

お穂の声はいつもより上機嫌そうだ。

「おお、お穂！ええとこに来たわ。」

お琳がぱつと立ち上がった、急いで裏へ回っていく。母は豆腐を刻むのを再開し、父はその母に、昨日釣り上げたらしい鰹の話（今夜の夕飯につけ丼をねだっている）をはじめた。突然、家の中の雰囲気さがりと変わったので、隠がただ立ち尽くしていると、あつという間に手を引かれてやってきたお穂がお琳の席に自然に腰をかけた。

普段よりも一層きらびやかな着物が目にまぶしい。牡丹色と黒、薄紅色の鮮やかな階調の中に、蛍の光のような雪のような丸い白が舞い散っている。今日は人より茶がかった太い髪も、赤い星の形をした花がついたびらびら簪を挿して、二つ結いになっている。

「おお、いらっしやい、お穂ちゃん。相変わらずお似合いの着物だね。」

父の上ずり気味の声に、お穂はにっと笑って、

「ありがとうございまーす。」

その言葉を聴きながら、隠はぼんやりとお穂の気合の入った着飾りを見つめた。

（皆祭りが楽しみなんだ）

金武丈老人が言うのだからそれは楽しいものなのだと思っていたが、まさかここまで気を入れてめかしこんでいるお穂のような者はいないと思っていたのが本音である。

（異国のものが参加していい祭りなのだろうか）

そういえば出店が開かれる神社は、とても由緒のあるものだと先にお琳が言っていた記憶がある。地元の人間たちが守ってきたから、古い神社でも今江戸に建っているのだろう。それを考えると、よそ者が入りづらい場所とも思えた。

（どうしよう）

考えてから隠は、今己が胸中に浮かんだ言葉に、ふっと馬鹿らしさがこみ上げるのを感じた。

祭りに行かないと決意を固めていたつもりだったが、本当は自分はやっぱりお琳とともに祭りへ行きたがっていたようなのだ。

「あれっ、隠ちゃんのその浴衣」

不意にお穂が物珍しそうに軽い笑顔を浮かべて、金魚が泳いでいる黄色い浴衣をしげしげと眺めた。

「えへへ、懐かしいやろ？」

「うん。お琳が池に落ちたときの……」

「しいっ」

口元を押さえようとしたお琳の手のひらを無理繰りはがし、お穂はくすくす笑いながら、

「それで、帰る途中に猫にかまれた浴衣。」

話を聞いて隠は、自分の姉妹達の中庭にある、岩囲みの池を思い出した。無数の錦鯉がときたま互いにすれ違いながらゆううつと泳いでいる様を、隠はやはり金武丈の背中からこっそり覗いていた記憶がある。

（鯉は……どうなったんだろう）

急に浴衣の赤い金魚が錦鯉に見えてきた。隠は振袖の金魚を目の前に持ってきてじつと見る。

「よく似合っていますね。」

落ち着いた声でそういわれて、隠はその日本舞踊の途中で振袖にごみを見つけた役者のような格好のまま声の主の顔を見上げた。

お穂はいつも通りに微笑んでいた。お琳へのそれとは少々違うも

のが感じられたが、お穂は確かに浴衣を似合うと思っっているように見えた。

（あ……）

しとやかな笑顔は、隠を拒んではない。その上にお琳の、

「ほら、隠、祭行こ。……行かなきゃもつたいないやろ？ 神輿を間近で見れる好機到来や！」

幸せのあふれ出ている晴れやかな表情に、ついに隠の決心が折れた。

隠は、ほんの少し、隠を凝視していてやっとそうとわかるほど浅く、小さく頷いた。

「やったあ！」

お琳は両手を勢いよく挙げて、隠の肩をやわらかくたたき

「隠がお祭り、行く言つた！母ちゃん！」

喜んでぽんぽんと軽々と飛び跳ねるお琳の後ろ髪が、同調するようにならうに揺れた。

「まあ、よかったやないの！ そしたら、ほら、早く食べたって。これから着替えるつもりなんやろ？ ああ、お穂ちゃんも召し上がっていつて。」

「いえ、私は神輿の途中の休憩場所で……」

「ええから遠慮せんで！せっかく来てもらたんや、食べてもらわんと……」

母は先に隠の粥が入っていたあの花柄の茶碗に茶飯をどさつと盛ると、

「はい、お穂ちゃんの分。」

と、まだうれしがって飛び跳ねていたお琳の手のひらにひよいと乗った。お穂は部屋の奥に重ねてある赤い漆塗りの正座椅子を持ってきて、音が立たないよう食卓の端の方にそつとたたせた。丁度隠と向き合う場所である。

しかし実際は、隠は食事の最中はあまりお穂と目が合うことは無かった。というのも、母は何を間違えたか、張り切りすぎたらしく普段の四倍を越えるであろう茶飯を隠の茶碗に盛り付けたので、隠は箸を動かすのに夢中で前をちらとも見る暇はなかったのである。

しかしいくら頑張っても小食な隠にこの量はいささか多すぎた。それに茶飯だけでなく、ししゃもの塩焼きや冷奴などおかずも盛りだくさんなのである。邪魔に思えてきた黒髪を左へ流してただ食べ続けながら、隠はお琳の若々しい母が、自分が御輿ではてないように気遣いしてくれていたという事を悟った。

あと茶飯が半分というところまで行つたとき、

「食べきれるかい？」

お琳の父が、油揚げと貝割菜の和え物をほおばりながら、上目遣

いに尋ねてきた。隠がうなずくにうなずけず、手元を凝視して黙りこくると、お琳がいきなり隠のうなじを指でついとなぞった。

「まだ、かかる？」

ひょこつと顔を出したお琳を見て、隠は目を丸くせずにはいられなかった。

「あら、お琳、いつのまにまた髪が伸びたんねえ。」

お琳の一つ結いが随分と下になっている。耳にふんわりと茶色の髪がかぶさって、なんだか毛の長い狐のようだ。日の光を受けて、毛先がまばらに光っている。日常で愛用している段鹿の子の浴衣とは大違いの、何やら花のような紋章が大小に描かれている分厚い着物、山吹色が目に華々しい。

「そう驚くことないやろ。いつも通りや。」

といいつつ見せた笑顔だけがいつも通りで、何処と無く大人びた雰囲気漂わせているお琳に、隠はついまだ口に入っている茶飯のことを忘れていた。

「口動かしい。あと半刻もしないうちに神輿の時間になってまうで。」

気づかされてまだもすもすとやりだすと、お琳が後ろ髪をいじっている。

「あ、気にせんといて。ちょっとめんこい髪飾りをしたると思ってな。」

櫛の齒がするりと髪を通っているのを感じつつ、隠は麦茶を飲み干した。

「お琳、また着替えるのが早くなっただけだな。」

父の声にへへっと笑って、お琳は隠の髪を二つに分け、さっさと横のほうで結った。首の辺りがすっとした。

「隠さんは、お琳と同じ年なのかい？」

箸を茶碗にわたした父にそう問われた。

「さあ。……隠、今いくつ？」

隠は無反応のまま、茶飯の最後の一口を上げだし大根に添えてあった大根おろしと一緒に口に入れた。

「……それもわからんらしい。」

「へえ……。」

「ごちそうさま、と手を合わせ、父が食卓をさっっていく。お琳がぱつと隠の側を離れ、父の膳を下げに行った。どうやら髪飾りは無事につけられたらしい。なんだか首がすうすうとしている。」

「隠ちゃん、ちょっとこっち向いて。」

柔らかな声に応じて振り返ると、すぐ間近にほころんだお穂の顔があった。

「なんだか昨日より明るく見えるね。」

「どれ？」

お琳がお穂の陰から隠の顔を覗き込もうとしたとき、西のほうから若い男衆の騒ぎ声が聞こえてきた。

「お、神輿か？」

お琳が気合を入れたかったのか、きゅっと帯を締めなおした。

「おりん、喧嘩しに行くんじゃないんだから……」

お穂がお琳の肩に手を置いて、たしなめた。

三 瓜二つ（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

三 瓜二つ*

* □ * □ *

* □ * □ *

赤い提灯。紫色の風車。真つ白な面。

神社は嬉々とした人々の声に包まれている。

その色に囲まれた道を、一人の少女が立っている。

影のにおい。

「やはり、あの子は、まだ……。」

* □ * □ *

* □ * □ *

「ああ、食べた食べた！」

お琳が何回そういつたか知らないが、その言葉とは裏腹に、お琳は次々と店を巡っている。勿論、お穂と隠の手を遠慮なくぐいぐいと引いて。

「お、おりん、去年より食べる量が増えたような……。」

「そりゃあ、そうや。人間はみんな、大きゅうなるんやから。あつ、たこやき！」

おおはしやぎのお琳であつたが、隠は人に囲まれたまま、お琳の進む方向以外身動きが取れない。懐の錢袋が走るたびにチリンチリンと音を立てる。

しかし、この雰囲気は嫌いではない、と隠は空を見上げた。

日はすっかり暮れて、北斗の七星が闇色に映えている。うすく刻んだような月は、今にも消えそうだ。

神輿は隠の思っていたより小さくて、そして想像よりも凝つたつくりであつた。きちんと階段が作られ、細かく金が張られ、そして頂上に立っている鳥は、羽一枚一枚が手作りであつた。その口には、今年取れた稲が一本、控えめにくわえられていた。

「隠、たこ焼き食うか？」

お琳が大玉のたこ焼きをひょいっと差し出してきた。口角に生醬油やら黒蜜やらがついている。されるがままに口にたこ焼きを放り込まれてもぐもぐやりながらあたりを見回すと、様々なものが目に付いた。

赤提灯に限らず、色とりどりの提灯が屋台の屋根を彩っている。

神社のあちこちにある、お琳いわく不思議な食べ物、甘氷あまひょうの屋台に目を奪われた女子らや、風車を振り回して姉らしき女性になだめられるほんの小さな男の子。なにかもが賑わいをかもしだしている。『人間の祭は神の祭りとは似ても似つかない物だ。堅苦しい儀式の代わりに、盆踊りを催し、人々は楽しそうに出店を巡る。』

金武丈老人が教えたことには、嘘の欠片も埋まっていなかったのだ。

（師匠……）

「お穂っ！」

唐突に耳元で叫ばれて、隠は足が生えかけたおたまじゃくしの如く飛び上がった。あわててお琳の方を見ると、お琳は隠の手を即座に離して、人ごみを掻き分けて奥へ奥へと進んでいってしまった。

（早い）

隠もすぐさま後を追ったが、混んだ場所に隠の腕の力はいささか小さすぎて、どんどんお琳の背中が見えなくなっていく。

あっという間に取り残されて、隠は一人になった。父や母は、子供が三人もいるからと安心し、半刻ほど前に別れてしまっている。

（探そうか）

でも、何もいわずに去って行ったのなら、ここで動かずに待っていたほうがいいかもしれない。

（でも）

考えに考え、隠は、お琳とは反対の方向に歩き始めた。

お琳はきよろきよろしていたから、たぶんお穂はどこかではぐれてしまったのだろう。二人がかりで探したほうが、見つかりやすい

に違いない。

たまたま手に持っていた、お琳の桜色の扇子で人間を掻き分け掻き分け、ひたすらお穂の着物を探した。祭りとはいえ、先ほだからすれちがう女衆にお穂を超えるきらびやかな着物を着ていた者はいない。髪飾りもお穂がしていたのは人間界では一風変わった珍しいものだ。

「お、おい、押すんじゃないよ！」

中年の男の声と共に、目の前に甘酒の汁が一瞬止まって見えた。隠はとつさに、ごく弱い結界を張った。汁は壁に当たって、隠にはかからなかった。

しばらくすると、突然人気の無い広場に出た。当然、お穂の気配も無い。

しかし、お穂の影に似た匂いが仄かに感じ取れた。こんな場所は通った覚えが無いが、お穂は多分この辺りにいるはずだと思い、隠は探そうと右を向いた。

その時。

信じられない顔が、こちらを向いていた。

(えっ)

隠はその場に立ち尽くした。一時、そこは二人とその他で区切られたように、大変な静けさとなった。静かな夏風に、長い髪がなびく。

あちらもあちらで、しばらく臙脂色の瞳を見開いたまま固まっていた。まばたきすらせずに、じっと隠の目元を見つめている。

すっかりした背格好のその男子は、女のように中途半端な長さの髪を無造作にたらし、前髪だけをほつれかかっている江戸打ちの太い紐で乱雑に束ね、余った紐が頬を伝うようにぶら下がっている。

お世辞にも清楚な佇まいとは言いがたく、一瞬疑ってしまうが、それでも顔は『あの子』だった。

「朱眼」

見詰め合ったままその名を呟く。これまでの、一言を発するたび

にひそかに感じた難しさが夢だったかのように、するりと口をついて出た。何時ごろからか、忘れかけていた寂しさが、ちらとその姿を見せたように思った。

「え……？」

目の前の少年は、思わずといった風に声をあげた。大分低く、大人びている。

少年はふと目を伏せた。表情はよく見えない。悲しがっているようにも見えるし、面倒がっているようにも見えた。

次の瞬間、少年は時の流れのようにすばやくするりと隠の横を抜けて行ってしまった。

「あっ」

追いかけようとしたが、なぜだか脚が動かなかった。

他人の空似だ。

彼であるはずがない。

だってあの子は……。

私の見張りに……。

（すごく、似ていた）

人々の賑わいが、耳に戻ってくる。それで隠の記憶も戻ってきたらしく、

（そういえば、お穂を探していた）

と思い出し、影の香りに注意して（屋台の光があるとはいえ、影自体は日の出ている時分より薄く、香りも僅かである）してまた歩き始めた。

が、しばらくしないうちに隠は足を止めた。先程の影の香りが朱眼……いや、あの少年のものならば、お穂がここにいたとは判らないと気がついたのだ。

隠は元来た道を引き返した。なぜだか人が少なくなっている感じがする。皆どこかへ移ったのだろうか、と考えていると、自分呼び止める声が肩越しにかかった。

「隠！」

左の通りの出店と出店の間に、お琳とお穂が手招きしているのが見える。

（待たせたらどうか）

足元にいる小さな子供を蹴飛ばしそうになって、少々よろけながら二人の方へ近づくと、なにやら見覚えのない髪飾りが目に入った。「ごめんね、途中ではぐれてしまっ……。」

と、やっぱり頭を下げるお穂の簪も三つに増えていた。

椿をかたどったもののように見えるが、華々しいものではなく、かたい和紙で作られた簡単なものだ。おしべの先も、和紙を丸めてそれらしくされている。

見とれていると、お琳がその目線に気づいたのか、

「ああ、そうや、隠にも……。」

と言つて、同じ簡単な簪を差し出した。恐る恐る握ったそれを見れば、椿の代わりに菖蒲の花がごちんまりとつけられている。

お琳に気づかれないようそつと奥へ目を凝らすと、簪を渡している場所が輪投げ屋の陰にちらりと見える。人々が二列にならんでいたが、隠はそれを眼中に留めてすぐに理解した。

（地元のひと、よその者達と分けているのか）

「だから、隠も一緒に……。……。どこか、気になるところでもあるん？」

声を掛けられてはつと我に帰ると、お琳の玉のような澄んだ瞳いっぱいに、不思議そうな色が浮かんでいる。お穂も

「早く行かないと、開会の座に間に合いませんよ？」

「あ、もしかして、盆踊りも初めてか？」

どうやらお琳は、隠が簪の手渡し所を確かめている間に大分話を進めてしまっていたらしい。とりあえず盆踊りは、神界にいる間に何度か学んだのである程度は知っている。

「そうか。じゃあ……。走るで！」

お琳は本当に走るのが好きだ、と隠は思った。

三 瓜二つ*（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

三 瓜二つ**

息を切らせた二人は、息を切らせない一人に必死についていった。その結果、息を切らせた方の二人が喉が痛くなるほどの努力は何とか報われ、盆踊りが始まって間も無くして三人はそこへたどり着いた。

「ああ、間に合った！」

というすらとした綺麗な声のお琳が、のびのびと両手を上に伸ばした。

「おりん……」

お穂はあたりを気にせずに地面にしゃがみこんだ。頬が真っ赤に染まっている。ぜいぜいと途切れ途切れになつた息を吐いている。

隠も勿論、息を切らせてはいたがしゃがみ込むほどではない。どうやらお穂はその上級な家柄がたたつて、あまり体力はないらしい。つた。といっても隠も、姉妹達の屋敷へ引越すまでは——ある期間を除いて——走ることなどあつたら珍しいことだつたから、生まれつきというものもあるのだろう。

日が丸々西へ沈んで、星の少ない夜空に提灯の赤や青の光が映える。大きく音の出る手拍子をしている、四十路ほどの男の人たちの手のひらがまだほんのりとも赤くなつていないところを見ると、お琳の言葉は本当だつたようだ。

「今年は一段と派手な提灯が飾つてあるみたいやな。あつ、お穂、あれは去年お穂が作つた提灯とちゃう？あそこに星の形に穴が開いた……」

色とりどりの提灯は、先ほどまで目を通してきた屋台のものとはまた格別である。お琳曰く、昨年に開かれた町内会での提灯の作り方を教わるという行事で庶民がこしらえた提灯が、盆踊りの台の格子にいくらかずつとめてあるらしい。

「そう？私にはよく見えないんだけど……色はあれだつたかもしれ

ないな。おりんのは……。そうか、自分で踏み潰したんだっけ。」

お穂が一人で勝手に噴出した。

「隠、舞見えるか？」

軽くうなずいたが、隠は舞を披露している肌の白い女性に釘付けである。

（多分あれは、化粧をしていない）

お穂も負けず劣らず白いが、台の上で軽やかに舞をふんでいる女はそれはもう雪のように白く、それが提灯の緑に淡く染められている。美しい人とは、あんな者のことをきつと指すのだ。

三味線のぼろんと零れるような音が、その動きをとめた。舞は終わってしまったらしい。やんやとはやし立てるのは、男衆が中心である。

女性は無邪気な笑いを振りまきながら、ゆっくりと段差を下りていく。程なくして、その優美な姿は人ごみの中に姿を消した。

「さて、お次はどなたかな？」

耳元でおばあさんのしゃがれた声がぼそぼそと聞こえる。

「犬山さんとおじょうちゃん、今年も踊るんですかねえ。」

「ああ、あの子もまた真つ白よねえ。でも、一緒にいる早外坂のころの女の子の方が、踊りは好きだわ……。」

「でもお母さん、最近はおつぱら望月さんこの尼さんが人気って話やんけ。」

ぼんやりと、老婆やそうでない者達の話の話を聞いていると

「隠、今年は隠も踊ってみるか？」

お琳に肩を叩かれて振り返る。と、ひょこつと現れたお琳の満面の笑み。隠はちよつと固まってからゆるく横に首を振った。

「そうか！じゃあ、この次にあそこにたつんやから、ちゃんと簪つけとつてな。」

見間違いだか何なのか知らないが、どうやら誤解をしたらしいお琳は、金魚の浴衣の懐のあたりをとんとんと軽くたたくと、先ほどから盆踊りを司っている、紅紫色に白銀だの浅縹（薄紫）に丸く描か

れた藍の手毬模様は目に何かくる）だのをのせた華やかな着物に、大千鳥のまぶしい帯を四方に盛り上がる形に結び、おまけに遠目から見てもそれとわかるような仰々しい檜扇ひおうぎの帯どめを付けた、目立つためだけに生まれてきたような格好の者に声をかけに行った。日和下駄の音が人混みの中に吸い込まれていく。そのあとを、周囲の羨みの目を華麗にかわしながらお穂がついていった。鼻緒の際につけた、高色そうな薄紅色の硝子細工をしゃらしゃらと躍らせながら、そしてそのまた後を、隠が一步踏み出そうと軽く袖を上げたそのときであった。

気付いたときにはもう手遅れで、袂に重みを与えていたものは地面に落ちて、人ごみにつぶれていた。

盆踊りの時に使う簪だった。

菖蒲の花には二ノ字の形の跡がついた。花弁がしおれたようになって、もう飾りに付けられるような有様ではない。

（どうしようか）

拾い上げた砂っぽい簪を手に悩んでいる間に、お穂のあのしゃらしゃらという鼻緒の音がこちらへ向かってきた。

「隠、次の次の次に出られる事になったで！ 踊りは・・・そうか、教えてなかったんや・・・」

「なんとかいけると思いますがよ、お琳も私も盆踊りは慣れてるし……」

「そうか、手を組んでやれば……」

手の中の簪は、握りしめられてかざりと静かな音を立てた。悲しくなる一方で、どこか落ち着いている自分が少しわびしく思えてくる。

（師匠がいればいいのに）

幼いころ色々な意味で世話になった師匠こと金武丈老人は、手の内にある『気』の球を作り出すことができ、それに包ませると壊れ物が少しずつ元に戻って行くのだ。若かりし頃はそれを生業にして、小柄なかまえの店なりに大分繁盛したそうだ。

お琳とお穂は二人で、舞の振りについて喋り合っている。その隙に、隠はちらとくしゃくしゃになった菖蒲の簪に目をやった。

（もしかしたら・・・）

醤油の小皿を割ってしまった時の金武丈老人の手つきを思い出しながら、そうつと簪を囲い、そして、その手をとめる。

壊れたままでいい。舞台の上は、怖い。見ているから盆踊りは楽しいのだから。

いきなり手首をくいと引かれる。

「隠ちゃん、そろそろ出番ですよ」

隠し子の影のかおりが、隠を台へと誘う。前と、後ろから。後ろから？

目まぐるしく視界に入る人々の華やかな着物や簪や口紅の付いた小さな口に負けずに、首をその方向へと回す。その仕草に気づいたか、お穂がどうしたかと声をかけながら止まってくれた。その直後に、楽器のさらさらさらという雨の降る様な静かな音が聞こえてくる。

「あ……先に他の人が踊るみたい。おりーん！」

「おお、おすい……何だか様子が変に見え……」

どこにいるの？

どこにもいないよ。

どこにいるの？

いないものを探さないで。

どこにいるの？

もう消えてる。

ちらと江戸打ちの太い紐が見えた。

どうして？

どうしてだろうね。

いない。

いないんだよ。

あいたい。

誰かが雨の音で舞っている。

待っていた。

私は待っていた。

見つけた。

一度見つけた。

もう一度、見つけられる。

怖い。

視線が怖い。

人が怖い。

神が怖い。

「あの子」に会えない事が怖い。

ちがう。怖かったんじゃない。

それは、忘れていた感情。

瞬時、凄まじく、隠の中で、何かがはじけた。

気持ち、恐怖が、焦りが、金魚の浴衣姿の死神を襲う。目の前を振り袖で覆う。

（嫌だ）

「隠……？」

忘れていた感情。

「隠ちゃん、大丈夫？」

追い出した感情。

還ってきた感情。

会いたいのにあえないなんて、

淋しい……！

三 瓜二つ** (後書き)

読んでくださりありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1642s/>

迷灯鏡

2011年6月21日23時16分発行